

明治初期の英語習得における漢学の影響
— 認知科学的視点から

The Influence of Kangaku for English Acquisition in
the Early Meiji Era :
From the Angle of Cognitive Science

赤石 恵一
AKAISHI Keiichi

Abstract: *Kangaku* (the study of Chinese classics) had been pointed out as one of the factors for proficiency in English in the early Meiji era. *Kangaku* was a principal subject for Samurai in the Edo era. Almost all students of the Sapporo Agricultural College, who were born in the end of the period, learned *Sodoku* (an element of *Kangaku*) during their childhood as Samurai. Considering that the Japanese language was formed by combining Chinese and Wago (the original Japanese before Chinese introduced), the practice of reading *Kanbun* (written Chinese) in Japanese involves dual cognitive functions linguistically. As a result, *Kangaku* developed learner's cognitive/academic language proficiency and also encouraged their literacy in English.

Keywords: *Kangaku*, *Sodoku*, *Kanji*, early Meiji era, English acquisition, Jim Cummins

漢学、素読、漢字、明治初期、英語習得、ジム・カミンズ

1. 漢学と英学における学力の関係

漢学と英学における学力の相関関係を表した記述は少なくない。昭和2年に発表された浦口文治『グループメソッド』所載「反響」にある佐波亘の一文はその一例である。

筆者が年少の時、屢々聞かされたのは漢文ができないと英語はできませんぞ、漢文のできる人は英語もうまいといふのであった。¹

このような指摘は明治初期に提起された。当時、教育の主流は英語の正則教授、いわゆるイマージョン・プログラムである。太田雄三(1995)が述べるように、「西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行われ」ていた。²しかし、彼等は幼少期から日本語を「犠牲にして」いたわけではなかった。当時の代表的な高等教育機関として挙げられる札幌農学校における1,2期卒業生のほとんど(1期卒業生は計13名中、士族9名、平民2名、不明2名、2期卒業生は計10名中、士族7名、神官1名、不明2名)が旧士族階級、またはそれに準ずるもの(豪農等)に属し、安政から文久にかけて生れている。佐波の後の義父となる植村正久もまた安政生れ、士族である。彼等が英語を本格的に学習し始めたのはおよそ10代前半であった。つまり、その初等教育においては全く異質な、江戸末期の武士教育を受けていたことになる。そのような背景が、冒頭のような訓戒に繋がっているのである。

2. 江戸末期武士教育としての漢学

江戸時代に武士が受けた教育の基本的内容を、R. P. Dore (1965)は「手習い、漢学、少しばかりの算術、正式の作法の訓練を若干、そして武芸の実習」³と述べた。石川謙(1971)の『日本庶民教育史』における調査では、寛永から明治に至る藩校272校中、漢学を正科として教授しなかったものは1つとしてない。⁴武士教育の核は、手習い、いわゆる習字を含めた漢学であったと言って差支えないだろう。漢学は英学の場合と同様、漢語を含めた漢語圏の文化を研究する学問である。ただ、漢学の場合、言語習得のアプローチにおいては日本語としての読方、いわゆる読下しがあつて原則として「変則」であった(荻生徂徠等、「正則」を唱えた例⁵は漢学の歴史からすれば異端と言える)。

従来の漢学者と呼ばれた人々は、儒者的な風格を帯び、中国の学問については幅の広い知識を身につけていた。即ちもともと儒学には経と史が含まれており、漢学者といえば、哲学、文学、倫理学、政治学、経済学、法制学、史学等々、いわゆる八宗の学にわたっての知識を得ていた。且その上見識があり、さらに詩文までよくした。⁶

三浦叶(1998)『明治の漢学』からの引用である。武士はこのように多彩な教養を求められた。その教育形態に関し、海原徹(1983)は次のように述べている。

初学者はまず素読からはじめるが、これは四書や五経などを句読を切ること重点をおきながら、一字一句正確に読む段階であり、誦読、授読、素読々授などがある。素読の授業が終わると、今度は自力で読む。それも早く、長く読み続ける段階に入る。独読、独誦、復読、温習などがそれであるが、ここでは二、三名で行う対読、七、八名で行う輪読などの集団学習もはじまる。自読過程で併行される場合もあるが、最後に登場するのが講義である。課書の意味、内容を学ぶもので、教師による講釈、講読が中心であるが、生徒も参加した会業、輪講が行われる場合もある。若干の異同はあるが、この学習スタイルはすべての漢学塾に共通していた。⁷

明治初期の学生が漢学におけるどの辺りまでの課程を消化していたか、定かではない。札幌農学校 1,2 期卒業生の履歴を見る限り、7 歳前後から藩校、私塾、寺子屋等様々な教育機関で 2, 3 年漢学を中心に学んでいる。その後、英語を始めてから東京英語学校、工部大学校予科に入学するまでのさらに 2, 3 年間、英学と並行して漢学を学んだ。少なくとも素読は行っていたに違いない。漢学をそれ以前に学んだ福沢諭吉のような人物の場合、その課程は講義をも含み、最終的には独学にまで至っている。⁸

確かに農学校 2 期生新渡戸稲造、宮部金吾は自らの漢学の教養の乏しさに気づいていた。⁹ しかしそれはあくまで前世代との比較であろう。新渡戸の著作『自警録』を見れば、漢文出典の引用は決して少なくない。書き出せば『孟子』、『論語』、『老子』、『十八史略』、『孫子』、『礼記』、『春秋』、『詩経』、『莊子』、『孝経』、『易経』に及ぶ。後年、学んだものもあるかもしれない。しかし石川松太郎(1978)の研究から、藩校の漢学において「あらゆる部門に優先して絶対多数をしめている」書籍が「四書・五経を中心とする『経書』」¹⁰ であったという報告を引いて考えれば、素読の段階で新渡戸等も上記の多くを読破していたと考えてもおかしくはない。新渡戸等と同期である内村鑑三の後年の講演¹¹ 中には、彼が少年時代、英語を学びながら頼山陽の漢詩を読んでいたことが分かる発言がある。また、大島正健著『クラーク先生とその弟子たち』からは、農学校 1 期生の佐藤昌介や大島が在学中、折に触れて漢詩すら創作していたことが分かる。幕末から明治初年にかけて中等教育まで達していた学習者層は、その進度、深さこそ違え、少なくとも素読を共通に通過

していたと言ってよいだろう。

3. 素読の認知科学的意義

素読に関して竹内照夫(1981)は次のように述べている。

素読とは漢籍の文章に対する、解釈には至らない単なる訓読のことである。江戸時代には四書五経や史記・漢書はもとより詩歌随筆学術論文など多くの漢籍が、学者文人たちによって訓点をつけられ、注釈を加えられて翻刻されていたから、最初に訓読法の要領を人から教えてもらいさえすれば、独力で多くの書を読解することができた。¹²

また、幕末水戸藩の、或る漢学塾の様子は次のようなものであった。山川菊栄著『武家の女性』からの抜粋である。

お塾の方ではだんだんに集まってきた何十人の子供が、声をはりあげて、ある者は『論語』を、ある者は『孝経』を、それぞれ年と学力に応じて、いま自分の習っている所の素読をやっていますから、その賑やかなこと。この朝飯前の素読を「朝読み」といいますが、朝読みは年中やります。¹³

この「朝読み」の素読の声で、子供の頭の良し悪しはたいてい分ったもので、大勢の中で、「あれは誰さんの声」などいわれるようにハッキリしたのは、必ずしも大きい声ではなくても、際だって出来のいい子にきまっていたそうです。¹⁴

これらの記述から素読が、年少者が漢学の初歩として、訓読法を学び、ひたすらに漢文を日本語として読下す朗読活動であったことが分かる。しかも、その評価には認知科学的視点すら感じられる。素読の段階では、文章の滋味は必ずしも求められていない。R. P. Dore (1965) が指摘するように、「経典とは所詮、深遠な哲学的内容をもつものであって、未熟な精神にそれを理解することを望むのは無理な注文」¹⁵ と言わねばならない。とすれば、素読という課程の意味はまず、文章を読みこなすための方法を知り、音読することによって言語が持つリズム・抑揚、文の纏まり(chunk)を体得することであったと思われる。認知科学的に言えば、諳んじてしまうほど執拗に反復するその過程において方法そのものを内在化し、認知した方法を応用していく中で、

その方法をメタ認知していく作業であったと言える。新渡戸はこう述べている。

東洋でも西洋でも、精神の糧となるべき古典の暗誦が、初等教育の第一歩に踏み入る少年に課せられて来た。我国では、五経のいはゆる「素読」がそれであり、西洋では、ラテン、ギリシャの古詩等を暗誦させたものである。現今、かかる機械的な教育法は排せられ、行はれなくなつたが、この方法も、巧みに用ひられる場合は、非常に有益なることを、忘れてはならない。これは自己の志すその道その道によつて、その最上の古典を、少なくとも、しらずしらず暗誦してしまふほど、くりかえしくりかえし熟読するといふのを、逆に行つた便法である。¹⁶

4. 明治初期の英語習得における漢学・素読の影響

では実際、素読を基礎とする漢学はその後の英語習得にどのような影響を与えたのであろうか？漢学と英学における学力の関係を最も早く指摘したのは中村敬宇かと思われる。彼は慶応2年、当時35歳の儒者でありながら幕府の留学生としてイギリスに学んだ。¹⁷ 下つて明治20年、当時の英学熱が漢学の撤廃論に及んだ際、中村は「漢学不可廢論」を唱えた。その中に次のような節がある。

今日洋学生徒ノ森然トシテ頭角ヲ挺ンデ前程万里ト望ヲ属セラルル者ヲ觀ルニ、皆漢学ノ下地アル者ナリ。漢学ニ長ジ詩文ヲモ能クスル者ハ、英学ニ於テモ亦非常ニ長進シ英文ヲ能シ、同儕ヲ圧倒セリ。

予倫敦ヨリ歸リシ初メ、兎輩ヲシテ漢学ヲ廢シテ専ラ英学を為サシメタリ。然ルニ兎輩ノ英学ノ業始メノ程ハ進ミタレドモ、進ミ難キ所ニ至ツテ止マレリ。

予又幼年ヨリ洋行シテ中年ニ歸朝セシ者ノ一兩輩ヲ見タリ。語学ハ上達シタルノミニシテ、亦皆進ミ難キ所ニ至ツテ止マル者ノ如シ。之ヲ漢学ノ基アリテ洋行シタルモノニ比スレバ、タダ霄壤ノ差ノミニ非ズ。¹⁸

ここから読み取れることは2つある。1つは、漢学に秀でていゝものは英学にも秀でていゝこと、もう1つは児童に英学だけを与えてもあゝる段階で進歩

が止まってしまう、つまり漢学の素養のあった者に英学を与えた方がより熟達するということである。近年では斉藤兆史(2000)も、岡倉天心の英語力の基礎として漢学を挙げている。

後年の天心の卓越した英語力が論じられる際、とかく彼が幼少期に英語を「耳から」覚えたことばかりが強調されるけれども、僕はこの漢学修行が彼の英語習得を促進させたと考えている。言語習得に関する科学的根拠があるわけではないが、英語の苦手な学生が往々にして日本語の表現力に乏しいのを見るにつけ、話し言葉にせよ書き言葉にせよ、言葉そのものに対する感受性が語学力を左右するように思われるからだ。¹⁹

岡倉は6才からイマージョン・プログラムで英語を学んだが、ある時、「神奈川県、東京府の境界の標柱が読めなかったので、これでは日本人ではないと父勘右衛門が心配した」結果、寺の和尚から漢学を教わり、『大学』『中庸』『論語』『孟子』と順をおって学問が進みいくにつれ、二、三年のうちには曲りなりに漢詩の作をこころみるほど²⁰ になったという。

これらの指摘はその論における精緻の差こそあれ、J.Cummins(1976,1979,1980)の「閾仮説」(Threshold Hypothesis)並びに「発達相互依存仮説」(Developmental Interdependence Hypothesis)とほぼ同じ着眼を持っていると考えてよいだろう。

認知的劣勢を回避し、バイリンガルとして有益な局面を認知機能に作用させるためには、バイリンガルの子供が達しなければならない言語能力の閾レベルが存在する可能性がある(筆者訳)。(・・・,there may be a threshold level of linguistic competence which a bilingual child must attain both in order to avoid cognitive deficits and allow the potentially beneficial aspects of becoming bilingual to affect his cognitive functioning.)²¹

まず高いレベルの第1言語の発達が第2言語における相応の発達を可能にする。しかし、ある側面において第1言語が十分に発達していない子供にとっては、初等教育における第2言語の集中的な接触は第1言語の継続的な発達を遅らせる可能性がある。これは順に、第2言語の発達を制限してしまうだろう(筆者訳)。(The initially high level of L1 development makes possible the development of similar levels of competence of L2. However, for children whose L1 skills are less well developed in certain

respects, intensive exposure to L2 in the initial grades is likely to impede the continued development of L1. This will, in turn, exert a limiting effect on the development of L2.)²²

「閾」(threshold)とは2言語を習得しようとしている学習者がバイリンガルとして熟達するまでに経なければならない段階を区分けするものである。2つの言語の発達がともに低いレベルの場合、認知力に影響が出るため、学習が遅れる可能性がある。その閾を超え、次の段階、一方の言語のみ発達している場合、モノリンガルに比べて認知面に優劣は生じない。次の段階が、付加的なバイリンガル(additive bilingual)と呼ばれ、認知面ではモノリンガルより優位であると考えられる。これが閾仮説である。「発達相互依存仮説」は、例えば「読み」などの認知的、学力的に必要とされる能力(認知・学術言語能力: CALP: cognitive/ academic language proficiency²³)が、全ての言語習得に共通の基底能力(common underlying proficiency)としてあり、第1言語によってその能力が発達している場合、第2言語習得の相応の発達が可能であるとする説である。つまり、「漢学に秀でるものが英学にも秀でている」という中村敬宇の観察は、まさに付加的なバイリンガルとして認知面で優位な段階であって、「漢学の素養のあった者に英学を与えた方がより熟達する」という観察は、「発達相互依存仮説」と結果的に一致している。J.Cumminsがこのような仮説を初めて提唱したのが1976年であるから、漠然とした観察ながら中村の主張は、着眼としておよそ1世紀も早い。

一方、漢語を外国語として捉えることにより、その外国語としての学習が、さらなる外国語である英語学習の足場となった、とする視点が金子堅太郎に見られる。

是は福岡の修猷館にて漢学を修め、殊に正統の文章規範を修得したる素養が発して英文となりたるに依る。英文の構造と漢文の構成とは殆んど同一にして、唯其文字の差異あるのみ。余が論旨の高雅なると感想の精巧なることは皆な漢学より出でたるものなれば、・・・²⁴

これは金子が米国留学中、英作文において好成績を収めた際の回想である。彼は漢語と英語の語順がほとんど一緒であると指摘すると同時に、漢学で培った文章規範と文章の組み立て方が英作文に役立ったと述べている。漢語を外国語として捉えることはある意味当然とも言える。漢詩を白文のまま見れば、その規則が唐代に確立したものであるものとはいえ、それは紛れもない

漢語、外国語であろう。読下しという長い年月をかけて編み出された究極的な変則式受容によって正確な音こそ失われた（似た音としては残った）ものの、白文の語順は依然として漢語のものであって日本語のものではない。つまり、日本人は弥生時代以降、欧米語以前に、漢語という外国語との遭遇を果たしており、結果的に 2 度の大きな文化接収を試みたとも考えられる。そして 2 度目の接収の際、最初における極めて特異な何ものかが、少なからず影響した。太田雄三(1995)は前掲の『英語と日本人』の中に向軍治の次のような発言を拾っている。

私の語学の多少の学力の基礎は独逸語ですが其独逸語が進んだわけは漢学にあるのです。漢学が私の第一外国語です、二年で独逸語を覚えたのは不思議でも何でもありません、漢学の素養の然らしむる所です。²⁵

太田はこれに続け、その語順に関して「英語と漢文は似たところもあるので、漢文で引っくり返って読むことになれていたことが、英語の語順に慣れることを助けたということがあったかも知れない」²⁶ と述べている。しかしここで向の言う「素養」はそれ以上のことを意味しているように思える。先の金子の「正統の文章規範を修得したる素養」、ひいては J.Cummins の言う‘CALP’ と同一だと思えるのである。日本語は、「中国語に属する漢語と、和語との二重言語」(石川九楊、1999)²⁷ であって、加藤弘之の言うように漢語が「殆んど邦語の性質を帯たる」²⁸ ほどになっている、特殊な言語である。つまり、漢文を読下すという訓練は、当時、テキストが白文そのものであっただけに、漢文を日本語としてとらえる、あるいは外国語として捉える、その捉え方の両面において、複眼的に、共通基底能力の発達を大きく促す活動であったと言えるのである。

5. 現代における漢字教育の萎縮と英語習得への影響

そのように考えると、明治中期以降、問われ続けてきた日本人の英語力不振の一因として漢学、特に素読の衰退を考えることも出来る。もちろん、その背景には外国人教師の大量解雇、イマージョン・プログラムの終焉、国家としての学制の確立、学習者層の拡大といった大きな要因が密に絡み合っている。明治以降、漢学は学問の中心から離れ、「漢学」という一学科となった。船津富彦によれば、すべての新聞から「漢詩欄」が消えたのは、大正 6 年²⁹ だという。戦後は「漢文」という項目として「国語」に含まれ、現在、小学校

では全く教授されていない。

新渡戸の論文『日本における外国語の効用とその研究』(1925)の中に、当時の「中国学者」が2万字、「普通の教育の日本人」が4千字に及ぶ漢字を要求され、2千字以下の場合、日常の新聞が読めないとの記述がある。³⁰ 昭和56年(1981)に告示された常用漢字は1945字である。石川九楊(1999)は漢字の制限が結果的に、漢字とは不可分である「和語の衰退をもたらす」³¹と述べた。日本語は漢字を核とした語彙を多く持つ漢字仮名交じり文である。漢字の使用、漢字の教育が当時と比べて萎縮している今日では、継承される語彙は確実に減少し、日本語としての豊かさ、多様性が失われていく可能性がある。先に導いた結論は、こうした傾向が、これからの日本人の英語習得、第二言語習得にも影響を及ぼすことを示唆するものと考ええる。

【註】

-
- ¹ 佐波亘「痛快かつ独創的な好著述」浦口文治『グループメソッド』改訂三版、文化生活研究社、1927年、p373
- ² 太田雄三『英語と日本人』講談社、1995年、p71
- ³ R. P. ドーア、松居弘道訳『江戸時代の教育』(R. P. Dore, *Education in Tokugawa Japan*, 1965) 岩波書店、1970年、p114
- ⁴ 石川謙『日本庶民教育史』玉川大学出版部、1972年、p161
- ⁵ 佐藤誠実、仲新・酒井豊校訂『日本教育史』2、平凡社、1973年、p16
- ⁶ 三浦叶『明治の漢学』汲古書院、1998年、p4
- ⁷ 海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983年、p39
- ⁸ 福沢諭吉、富田正文校訂『福翁自伝』岩波書店、1978年、pp15-16
- ⁹ 太田雄三『英語と日本人』pp163-164
- ¹⁰ 石川松太郎『藩校と寺子屋』教育社、1978年、p90
- ¹¹ 内村鑑三『後世への最大遺物 デンマルク国の話』岩波文庫、1946年、p12
- ¹² 竹内照夫『四書五経—中国思想の形成と展開』第2版、平凡社、1981年、p238
- ¹³ 山川菊栄『武家の女性』岩波文庫、1983年、pp12-13
- ¹⁴ 同上、p14
- ¹⁵ R. P. ドーア、松居弘道訳『江戸時代の教育』(R. P. Dore, *Education in Tokugawa Japan*, 1965)p119
- ¹⁶ 新渡戸稲造「諸家の読書論」『新渡戸稲造全集』第11巻、教文館、1969年、p440
- ¹⁷ 宮永孝『慶応二年幕府イギリス留学生』新人物往来社、1994年
- ¹⁸ 加藤周一、前田愛校注『文体』岩波書店、1989年、pp23-24

-
- ¹⁹ 斉藤兆史『英語達人列伝』中央公論新社、2000年、p32
- ²⁰ 岡倉一雄『岡倉天心をめぐる人びと』中央公論美術出版、1998年、pp26-27
- ²¹ Cummins, J.(1976). The Influence of Bilingualism on Cognitive Growth: A Synthesis of Research Findings and Explanatory Hypotheses. In Baker, C. & Hornberger, N.H. (Eds.). (2001). *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins* (pp.26-55). Clevedon: Multilingual Matters.,p51
- ²² Cummins, J.(1979). Linguistic Interdependence and the Educational Development of Bilingual Children. In Baker, C. & Hornberger, N.H. (Eds.). (2001). *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins* (pp.63-95). Clevedon: Multilingual Matters.,p75
- ²³ Cummins, J.(1980).The Entry and Exit Fallacy in Bilingual education. In Baker, C. & Hornberger, N.H. (Eds.). (2001). *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins* (pp.110-137). Clevedon: Multilingual Matters.,p112-118
- ²⁴ 高瀬暢彦編『金子堅太郎自叙伝』第一集、日本大学精神文化研究所、2003年、p232
- ²⁵ 太田雄三『英語と日本人』 pp144-145
- ²⁶ 同上、p145
- ²⁷ 石川九楊『二重言語国家・日本』日本放送出版協会、1999年、p107
- ²⁸ 三浦叶『明治の漢学』 p92
- ²⁹ 石川忠久『漢詩を作る』大修館書店、1998年、p3
- ³⁰ 新渡戸稲造、富田清訳「日本における外国語の効用とその研究」(I. Nitobe, *Foreign Languages in Japan*, 1925)『新渡戸稲造全集』第19巻、教文館、1969年、pp528-529
- ³¹ 石川九楊『二重言語国家・日本』 p191